
和葉には向かない職業

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和葉には向かない職業

【NZコード】

N4909A

【作者名】

雪場

【あらすじ】

平次と和葉が学校の休みに訪れた旅行先。水中花火で有名なその場所で、巻き込まれたのが殺人事件。そこまでは平次も手馴れた展開だったのだが…。「向いてへん」と平次に一蹴された推理に、和葉が挑む!?

(前書き)

ええつと…本格的には言いかねますが推理物です。
あと、スクロールバーを見てもらえば分かるように、話が長い…
ということを予めご了承ください。

放課後の改方学園。

授業が終わり、人がまばらになつた教室で、一人だけ席に着いたまま本を開いている生徒がいる。

「平次！ 聞いとるん？」

「えつ？ 何か言ったか？」

はじかれるように読んでいた本から顔を挙げた。

「もう… また推理小説なん？」

「当たり前や。一昨日出たばつかの新作やぞ」

そういうて悪びれる様子もなく、また本に目を戻した。

まったく… 推理のことになると人の話もろくに聞かへんのやから…。
「そんなに面白いんやつたら、あたしもやってみようかな~」
ちょっとからかうよう、平次を横目で見ながら言ってみる。

間髪いれずにぶつきらぼつな答えが飛んできた。

「無理や。鈍うておつちょいちょいな和葉には向いてへん」

「ひょっとして… また道に迷つたん？」

半ば確信を持ちながら、平次に聞いてみる。

「いや、 そうやのうて…」

なにやらぶつぶつ否定してゐるが、うつそうと茂つた木々の中、舗装されてもいなでこぼこ道を延々と一時間近く歩き続けている。

（…間違いなく迷子や…）

はあ、と肩を落としてため息をつくと、再び平次と一緒にバイクを

押し始めた。

「あ、あれや！」

しばらくして、平次が突然大きな声を上げた。
指差すはるか向こうに、小さく青みがかつた屋根が顔をのぞかせて
いる。

「よつしゃ、方向が分かつたら、後はすつとばすだけや。和葉、は
よ乗り」

元気を取り戻した平次の後ろに乘ると、無意識に笑みがこぼれた。

バイクはぐんぐんスピードを上げてゆく。道の悪さも手伝つて、和
葉の体は何度もロデオのように大きく弾む。

「ちょ、ちょつと平次。もう少しスピード落として…」

そう言つた刹那。

不意に横の茂みから茶色の生き物 あとで和葉が平次に聞いたら“
鹿”と言つていたが が飛び出してきた。

「危ないっ！」

平次が短く叫んだ。

同時に急ハンドルを切つたバイクは激しく斜めに傾き、和葉と平次
は空中に放り出された。

ちょっとの間周りがスローモーションに見え、茂みの中へ落ちた衝
撃を背中に感じた。

…思つたよりたいしたことはなかつた。着地点が柔らかかつたのも
あるだらうけれど。

（それよりも、平次は大丈夫なん？）

探そうと思つて身を起こそつとすると、下のほうから声がした。

「和葉…重い」

びっくりして下を向くと、見慣れた黒いTシャツ。

「平次！なんでそんなとこにあるん？」

「アホっ！和葉が勝手に空から降つて来たんやないか！」

「だいたい、無茶な運転なんかする平次が悪い！」

平次のお腹の上に座り込んだまま始まつた口喧嘩。まあ、この程度の口論など、物の数にも入らないだろうが…。

思わぬアクシデントと些細な口喧嘩のおかげで、やつと田的田に着いたときには日が斜めに傾き始めていた。

本館までの一直線に続く道を、幾分スピードを落として走つてゆく。

「あそこが入口やろな」

大きな建物の前100㍍ぐらいのところに黒光りする鋼鉄の門があつた。

閉ざされたその門まで行こうと思つていた平次たちだが、手前の小さな、駐車場にあるような警備詰め所の窓から顔を出しているおじさんに止められた。

「君たち、そっちの門は歩行者専用だよ」

よく意味が飲み込めないまま、平次はバイクを降りた。

「オーナーが庭に凝つててね、ゆっくり見てほしいからって車両通行禁止にしたんだよ」

ヘルメットを外した平次にそう説明した。

「せやつたら、このバイクはどないしたらええん？」

人のよさそうな警備員は笑顔のまま後ろを指差した。

今来た道の20㍍くらい後ろに、横へ曲る道がもう一本あつた。

「ほら、そこを曲るとホテル専用の駐車場だよ。駐車場からは直接ホテルのほうに入るからね」

「ども、おおきに」

ヘルメットを再び被ると、和葉の待つバイクにまたがつた。

「にしても立派な車ばっかやな、ぶつけたりしたらえらいことにな

るで

ダイムラー・クライスラー、アルファロメオ等そつそつたる面々だつたが、車についての知識を全く持たない和葉には、その雰囲気が分からなかつた。

なんとか駐車場の隅にバイク用のスペースを見つけ停めると、ホテルの裏口に続く小さな門から一人並んで歩き出した。

両側を木に覆われた細い砂利道を抜けて、ホテルの裏門へ着いた。扉が木で取つ手が口の字型の、しゃれたドアを引いて、中へ入る。

「うわー、めっちゃ綺麗やん！」

入るや否や、目を輝かせて小声で感想を漏らす。

床と大きな柱は磨き上げられぴかぴかに光る乳白色の大理石。天井からは両手を広げたほどの豪華なシャンデリアが訪問客を歓迎するように、それ自体輝いていた。

和葉がその場の雰囲気に少し緊張しながらクラークでチェックインしているのを、平次はソファーに腰掛けてぼんやりと眺めていた。

「（あとでバイク壊れとらへんか確認しどかなあかんな…。派手に転んだわりに、どっちも怪我せーへんかつたし、それだけは幸いやな）」

クラークでは、和葉が何か、差し出された紙に書き込んでいる。ついさつきまでビジネスマンがいた場所に立ち、ボールペンで真剣に書類に記入している姿を見て、

「あいつ…あんなに大人っぽかつたか？」

思わず呟いてしまう平次だつた。

無事チェックインを済まし、部屋に少しばかりの荷物を置いた後、近くを散策しようという和葉の提案で、再びロビーに下りてきた和葉と平次。

「腹も減つてきとんのに、なんで今から散歩なんかしに行かなあかんねん」

「ええやん、夕暮れ時の景色も絶対綺麗やつて。パンフレットにも書いてあつたもん」

「んなもんどーせどつかの物好きが書いただけやろ…」

そこまで言つたときに、後ろから声がした。

「あら？ 平次ちゃんじゃない？」

しゃべりすぎて少しかすれたような女の人の声。

平次は反射的に「あちゃー」というような顔をして…。

「やっぱりそうじやない、変わつてないわねー」

ぎこちなく振り向いた平次の先にいたのは五十歳ぐらいの背の低いおばさん。

髪は灰色に近く、金縁の細いメガネを掛けて、指には幾つも大きな宝石の入つた指輪。

濃い紫の上着のそのおばさんに、和葉は直感的に嫌悪感を覚えた。

「…誰なん？ この人」

「ああ、前にオレに探し物頼んできた依頼人やつたんやけど…」

「かが 加賀 かよこ 香代子です。平次ちゃん、あつという間に解決しちやつてね～。そうだ、いい物見せてあげる、ちょっとついて来て」
加賀の強引さに、苦笑いしながら諦めたようについて行く平次。
その後ろで、和葉が不満そうに咳く。もちろん聞こえないようだが。

「つたく…何が『平次ちゃん』やの、なれなれしそうに…。大体自分のことしか考えてへん、つて感じがめつちやするわ」

そういうしているうちに、二階のスイートルームに着いた。
中に入ると、大きな円卓を囲むように二人が椅子に腰掛け、楽しそうに談笑していた。

「遅かつたですね…つと、その方たちは？」

正面にいたメガネの男の人方が立ち上がりながら訊いた。

「彼らは、昔お世話になつた探偵さんたち。たまたま下で出会つて。

平次ちゃん…えつと…

「遠山和葉です」

わざとそつけない言い方にしたけど、そんな些細な抵抗も無視する
ように話は進んでいった。

「それで、平次ちゃんたちに、私の自慢のあれを見せてあげようと思つてね」

そう言つうとサイドテーブルの上から黒い箱を持つてきて、平次に渡した。

「開けてみて」

言われるままに平次がふたを押し上げる。

和葉も、つい気になつて身を乗り出して覗き込んだ。

「うわ…凄い…」

ベルベット張りの、その中に鎮座する、和葉のこぶしごうの透明な石。

いびつな形をして、所々くすんでいるけど、何なのかはすぐに分かつた。

「ダイヤの原石やな…」

平次の声も、目の前に石に圧倒され、小声になつていた。

それから三人は同席している人たちについて紹介を受けた。

最初に立ち上がったメガネの人は鈴谷 譲さん。彼女の息子で、今は会社でそれなりの役職についているらしい。一番左にいたのがその鈴谷の友人の千代田 翔吾さん。

茶髪で少し恐そうな目つきの彼は、元会社の同僚で、今は独立してベンチャー企業を立ち上げている、と言つていた。その間に座つていたのが敷波 舞さん。派手な加賀とは対照的に、薄い水色のシンプルなワンピースで、清楚な感じのする女人の人だった。
かしこまったくように一礼すると、彼女が加賀の元秘書であったことを透き通つた声で伝えた。

「そういえば、今日は飛燕海岸ひやんで花火大会があるみたいですよ。行ってみませんか？」

話が盛り上がりってきたところで、鈴谷がそう切り出した。

「あ、それパンフレットに書いたりました。水中花火とかゆつて、めつぢや迫力あるつてゆつやつでしょ？な、平次、見に行かへん？」

「しゃーないなあ…」

「じゃあ、6時に下のロビーで待ち合わせましょ。お母さんは…」「部屋にいるわ。もう花火つていう年でもないし。テレビでも見るから、行つてきなさい」

肘掛け椅子に深くかけているその人に来たときより幾分丁寧に挨拶をして、一人はその部屋を後にした。

「和葉わふ、なにしとんねん、早よ行くで」「

玄関から、平次が部屋を覗き込むように声をかける。

「ちょっと待つて、見つからへんねん」

部屋の奥から和葉が答えた。ガタゴト音がするのは多分引き出しをひっくり返してこるからだろう。

「つたぐ、なんで支度するのにそんなに時間かかんねん…」

不満そうに呟くと、靴を脱いで部屋に戻った。

「なに探しとるん？」

見つからないのは、お守りだった。

「どうかで落としたんやと思うんやけど…どないしょ、平次？」

引き出しの前で座り込んでいる和葉に、ちょっと潤んだ目で平次は見上げられた。

一瞬の沈黙の後、平次はポン、と軽く和葉の肩に手を置いた。

「心配せんでもええ。お守りは消えたりせーへんから、絶対どっかにある」

そこで一度切つて腕時計を見た。6時を少し回っていた。

「せやけど、今日はもう暗いし、みんな下で待つとるから、明日探そう、な？」

小さい子供をあやすように、優しく諭すかのように言つた。和葉も落ち着いたようだつた。一、二度目を擦ると、小さく頷いて立ち上がつた。

予定の8時を少し遅れて、彼ら五人は出発することになった。

「それじゃあ、会場までの道は分かつてますよね」

ヘルメットを手に持ち、紺のTMAXにまたがつた鈴谷が訊ねた。
「ああ、真っ直ぐ行つて…市役所のとこ左折して…全部で30分ぐらいやつたつけ？」

「その調子なら大丈夫ですね。それじゃあ、お先に」

そう言つて笑顔で親指を立てて見せると、ヘルメットを被り、そのままバイクで走り去つた。

敷波の真つ赤なロードスターに続いて千代田の乗つた黒のセルシオがゆつくりと駐車場から現れ、平次たちに軽く手を上げて挨拶すると、一気に加速して暗闇の中へ消えていった。

「ほな、オレらもそろそろ行こか」

「今度は道、間違えへんでよ」

和葉は釘を刺すのを忘れなかつた。

飛燕海岸における、年間最大の行事とも言える水中花火。

この地方の観光案内書を開けば必ず載っているイベントだけあって、会場の砂浜は多くの人でごった返していた。

ざわついた空氣に、時折屋台からイカやフランクフルトの焼けるいい香りが漂つてくる。

「久しぶりやね、お祭りに来るんも」

すっかり元気を取り戻した和葉が嬉しそうに言ひ。

「せやなあ。おつと、早よ行かへんとええ場所、みんな取られてまうで」

ニヤつと笑うと、海へ向かって駆け出した。

「平次、ちょっと待つてや～」

和葉も慌てて平次の後を追いかけて真っ暗な海のぼりへ走つて行つた。

深い紫色の空に、咲いては消える光の華。

また一つ、海から空へ昇るたびに、体の中まで響くよつた振動が伝わる。

「月並みな言葉やけど、綺麗やなー」

平次が柄にもなく、しんみりと漏らす。

「ほらね、来てよかつたやろ?」

そう答える和葉の顔も、花火の色で、時折黄色や赤に染められている。

一時間ぐらひがたつたころだらうか、不意に和葉が声を上げた。

「あつ、敷波さん！」

和葉の手を振る先を見ると、敷波が軽く会釈してから、こちらへ向かつているところだった。

「…それでね、そのとき佳代子さんつたら、なんて言つたと思つ?
『私に忠告しないでちょうどいい!』って一蹴。あの時ばかりは、さ
すがに少し驚いたわね」

元秘書という肩書きから予想していたよりも、彼女はもつと人懐つ
こい人で、積極的に、昔の仕事の話や、趣味の話をしてくれた。
蘭のときと同じ様に、一度警戒心が外れた和葉と、話し上手な敷波
とは、一気に親しくなり、楽しそうに盛り上がつた会話を始めた。

時折聞こえてくる二人の笑い声を、平次は遠い目で花火を眺めなが
ら聞いていたが、不意に何かを思い立つたように、静かに立ち上が
つた。

「あ…和葉、オレ、財布部屋に置いてきてもうたみたいなんや。せ
やから、今からちょっと戻つて取つてくるわ」

少し離れてから、一度平次は後ろを振り返つた。
まだ和葉は敷波と夢中で話しているようだつた。
ふと自分の腕時計を見た。ちょうど8時半だつた。

水中花火も全てが打ち終わり、少しずつ、帰途に着く人の数が増え
ていく。

屋台も一つ、また一つと店を畳み始める、そんなときになつても、
まだ一人はその場に留まり続けていた。

「平次…遅いなあ」

そう言つて時計を見るともう11時。あれから3時間近くが経つ
ていた。

「そうねえ。お財布を取つてくるだけだつたらもうとつぶに終わつ
てるはずだし…一度、ホテルのほうに戻つてみない?」

「せやけど……アタシ、平次に乗せてもらひにきたから……帰るゆうつたつて……」

敷波はにっこりと微笑んで親指を立てた。

「心配しないで、私のロードスターがあるから」

彼女の車のドアに手をかけたときに、和葉の携帯が鳴った。

『ああ、和葉か？』

聞こえてきたのはもちろん平次の声。

「また待ちぼうけ食わせて……」

そのまま文句を言おうとしたのだが、後が続かなかつた。

平次の声の異変を感じたから。

彼にしては珍しく妙に焦つている感じで……

それも和葉を待たせたことではなく、もつと別のことで……

「どしたん平次、なんかあつたん？」

『ええから早よ戻つ……ああ、そつか……今から迎えにいくで、そのまま待つとき』

電話口から聞こえてくる完全にてんぱつた平次の声に、自然と周りが緊迫した雰囲気になる。

「それやつたら、今から敷波さんの車に乗せてもらひんやけど……」

『さよか、そうしてもらえると助かるわ、ほな、また後で』

早口にそうまくし立てるど、一方的に電話は切れた。

ろくに事情も呑み込めないまま、ひたすらに敷波を急かして真っ暗な車道を飛ばしてゆく。

「何かあつたの？」という問いにも、生返事しかせずに（というかできなかつたのだが）待ちきれないように何度も腕時計に目をやる。行きよりも早かつたのだが和葉にとつては耐えがたく長い帰路に感じられた。

車が駐車場に入るやいなや、飛び出すよつて車外に出る。

「平次、どうしたん！？」

駐車場は暗く、平次の表情は分からない。

開いた口から漏れたのは、抑揚を抑えながらも、少し震えた声。

「加賀さんが…殺された」

外の非常階段を駆け上る平次の後について、一階の加賀の部屋がある廊下まで来た。

客室のドアと廊下を挟んで反対側にある窓から見下ろすと、すでにパトカーが何台も止まつていて、真っ暗な周りの木々に規則的な赤い斜光を投げかけていた。

平次が話すところによると、探し物を終え、ちょうどホテルの前まで出てきたときに中から鈴谷が転がるように飛び出してきたというのだ。

立ち入り禁止の黄色いテープを気にすることなく持ち上げて、平次が現場に入つてゆく。

一瞬躊躇した和葉だったが、意を決したようにきつと前を見据えると、平次の後を追つた。

彼女は、部屋の真ん中にある安楽椅子にもたれかかったまま死んでいた。

ちょうどドアには背を向ける格好になつてゐるので、ぱつと見では穏やかに眠つているようにしか見えなかつた。

いつものように平次は、鑑識班の人に入念に死体の周りを入念にチェックしていた。

そのとき、ドアが静かに開いた。

「困りますね、現場に一般人を入れてもらつては」

和葉が驚いて振り向くと、そこに立つていたのはグレーのスーツを一寸の隙もなく着こなした刑事。

まだ三十代だろうが、縁の細い眼鏡が細面のインテリそうな顔によ

く似合つてゐる。

「あんたが今回の担当か？」

カーペットに四つんばいになつて何かを探していた平次が立ち上がり、軽く服を払いながら訊く。

彼はその質問には答えずに、

「ここの子たちを入れたのは、加藤君、君ですか？」

ちらりと横の警官を流し目で見た。

「しかし、如月警部、彼等は大阪府警の……」

「誰であるかは問題ではありませんよ。ただ、現場には警察官しか入れてはいけないということ。加藤君、分かりましたか？」
穏やかな口調の中にせせら笑うような印象を含んだままそつと、もう一度流し目で狼狽している警官の顔を見る。

そうして今度は平次と和葉のほうに向きなおつた。

「大阪府警のどなたのこ子息かは知りませんけれども、生憎ここは我々の管轄内。探偵こいつなら、どこか他の場所でやつていただけますか？」

冷ややかな微笑みをたたえたまま、さらりと言つてのけた。

「なんやねんあの如月とか言う警部、めっちゃ感じ悪いやん。いかにも他人をバカにしとるみたいなしゃべり方やし」

「まあまあ和葉、そういうきり立つてもしゃあないやろ」

ここは同じ階の平次の部屋。結局現場を追い出された二人は部屋に戻り、少し離れた場所で捜査を再開したのだった。

「現場の様子は大体分かったし、発見した状況やつたらもう鈴谷さんから話聞いたいたしな。あとは死因と死亡推定時刻やけど、あの警部ハンが来る前に鑑識の人と相談しておいたし、材料は充分や」

そう言つて平次は椅子から立ち上がり、部屋の中をぐるぐると歩き回り始めた。

平次の話によると、死因は細い紐のよつなもので絞められたことによる絞殺。死亡推定時刻は9時から9時半の間。ちょうど平次が財布を取りに和葉たちと別れた後のことだ。

そうして、第一発見者の鈴谷から聞いたといつ話。

発見時に部屋の鍵が開いていたということの他にはとりたてて目立つたものは無かつたが、屋外の非常階段を使えばロビーを通らずに現場に行けることから、彼以外の人には、それほど重要な証言は期待できない、といつのが平次の考えだつた。

…のちにこれは間違いだと分かるのだが。

「せやけど、何で加賀さんは殺されなあかんかつたん？確かに少しうつとおしいとこはあつたけど…そんな殺てまつほど…」

平次が足を止めて和葉のほうへ向き直る。

「そこや。その動機やけど、それははつきりしとるんや。あの人、でつかいダイヤの原石持つとつたやろ？…ほら、昼間見せてもらつたやつや。あれが…」

「まさか…盗まれとるん…？」

平次は黙つて頷いたとき、ドアをノックする乾いた音が響いた。

廊下で待つっていたのはさつき加藤と呼ばれていた、制服姿の警官。「警部から、皆さんにもう一度あるお部屋に集まつていただきたい、といつ」として…

部屋の真ん中にあつた死体はすでに片付けられてはいるものの、白いチョークで書かれた輪郭線が、未だに死体がそこに存在するような印象を与えている。

紺の作業服に身を包んだ鑑識係が先の開いた筆のよつなもので家具や壁を叩いている中、一人は再び部屋の中へと通された。

中には千代田、敷波が先に来ていた。

「少々お待ちください、もうすぐ、役者がそろつますですから」
警部が窓枠に左手を乗せ、真っ暗な闇を見つめながら振り向きもせずに言づ。

言われたとおりに、しばらくおとなしく待つていると、慌てたように走る音が遠くから聞こえ、ドアがゆっくりと開いた。

「どうもすいません……、シャワーを浴びていたものでして……」

1時間目の中間に来た生徒のように、おずおずと首を縮めながら鈴谷が入ってくる。

「さて、それでは始めましょうか。いえ、お手数は取らせませんよ」自信の満ちた声でそう言づ、警部の眼鏡がキラリと光った。

「それでは、簡単なことから片付けますか。皆さん、今日の9時から9時半の間、どこにおられましたか?…まあ、俗に言づ“アリバイ”というやつですけれど」

「私は…そちらの遠山さんと一緒に…」

敷波が横目でちらりと和葉の方を向く。

和葉は黙つて頷いた。

「千代田さん、あなたはその時刻、どちらに?…」

「一人で花火を見てたよ」

そう言つてポケットから取り出した煙草に火をつける。

「どなたか、そのことを証明できる人は?」

「だから一人で見ていた、って言つただろ。あんたの言葉を借りれば、俗に言づ“アリバイがない”最有力容疑者つてことだよ」
早口で吐き捨てるように言づと、大きく紫煙を吐き出す。

「ほう…そうですか、アリバイはない…と。鈴谷さん、あなたは?」
ビクリとした様に一瞬体をすくめ、ぼそぼそとした聞き取りづらい声で、

「ぼ、僕もその時間は一人でしたけど…でも…」

「でも、何ですか?」

「あの…僕、9時少し過ぎに敷波さんと遠山さん、挨拶してるんです。あそこからここまで、どんなに飛ばしても30分近くかかるんです…」

「正確に何時だったか覚えていませんか?」「鈴谷が最後まで言い終わらないうつに警部が訊いた。

「9時15分です」

はつきりした声で、和葉がそう答えた。

「ちょうどあの人が挨拶した時に、腕時計見ましたから間違いません」

「その時計、見せてもらいますか」

黙つて左手を挙げ、文字盤を相手に見せる。

警部も無言で和葉のほうへ歩き、自分の腕時計と見比べる。

「どうやら今のところ時間は合っているようですね。それでは鈴谷さんにもアリバイがある…」

「ちゅーじとは、とりあえず今の段階ではアリバイが無いのは千代田さんだけ、ゆーじとやな」

壁に腕を組んだままもたれかかり、今まで一言も発しなかった平次がこのときになつてようやく口を開いた。

警部はそれには反応せずに、横の警官になにか耳打ちした。
彼が出て行き、連れてきたのは平次たちも夕方出合った、門の手前にいた警備員。

「すみませんが、もう一度お話願えますか?」

「はあ…。ちょうど9時半前でしたが、私が本を読んでも、窓のほうから強い光が顔に当たつたのですから、ふと顔を擧げると…。ヘッドライトが一つ、こつちにどんどん近づいてきまして、その時に電話が鳴つたのですから、そこで田を離しまして…いたずら電話みたいで、無言だったのですぐ切つたんですが、受話器を置いて

もう一度見たときには、もうビニカへ行ってしまった後でして…」

警部が左手を挙げて話を制する。

「いえ、それで結構。どうもありがとうございました」

それから再び平次たちのほうを向くと、

「そのころに詰め所の前を通り掛つたのはそのバイク一台。聞き込みの結果宿泊客に該当する人物もおらず、ホテルのロビーを通つた人物もいないことから犯人がバイクでホテルへ向かい、警備員のいる詰め所の手前の道から駐車場に入り、外の非常階段を使って中に入つた可能性は高い。さて、この中で今日バイクをお持ちなのは、鈴谷さんと…」

一瞬だけの沈黙のあと、

「服部平次君、君は犯行時刻、どこにいましたか？」

不意を突かれたように平次の目がほんの僅か、大きくなる。しかしすぐに目を閉じると、組んでいた腕を解き、もたれていた壁から離れる。

ゆっくりと歩き出し、如月警部の前で止まる。

「探し物…しどつた」

目蓋が上がり、二人の目線が衝突した。

「アリバイは？」

「あらへん」

穏やかなやり取りには、チエスの名人同士が、お互ひを試しているような冷たさがあった。

必要最低限の会話が淡々と終わると、警部は平次に背を向け窓のほうへ歩き出す。

「犯人について、君の意見は？」

「あれだけの物を持つとつた被害者が鍵を開け放しにしどつたと

は考えにくい。被害者自身が鍵を開けたと考えるほうが自然や。おまけに被害者は後ろから首を絞められて殺されとる」

「と、いうことは？」

「顔見知り、それも親しいやつの犯行やな」

「じ名答。私も同じ意見です。ところで…」

彼はそこで話をいつたん切つた。

一度息を吸つたのち、挑戦するよつて言ひ。

「そのことが、何を意味するか…。服部君、もうお分かりですよね」

「ああ。被害者と親しい人で、このホテルにいるのはこの五人。ほんでその中にバイクを持つとるのが一人。その内アリバイの無いのが…」

平次もいつたん話を切る。

目を閉じ、しばらく沈黙が続いたのちに、ゆつくりと目蓋が上がる。

「オレやな」

「署まで、じ同行願えますね。もちろん、任意ですが」

背を向けたままの警部の言葉にも、何の動搖も示さずに答える。

「別にかまへんけど…。ただ一つ、もしあんたがオレを犯人やと思ふるんやつたら…」

ちらつと和葉に一瞥をくれる。

「完全な見込み違いやで」

「何でつ、何でやのつ！」

目の前のコーヒー テーブルにこぶしを叩きつける。

自分の部屋に戻つてから、和葉は何度同じことを繰り返しただろうか。

「何で、平次が逮捕されなあかんねん！」

半分震える涙声でそう叫びながら、もつ一度テーブルを叩き、そのまま腕の中へ顔をうずめる。

厳密には『重用参考人招致』として呼ばれただけで、逮捕されたわけではないのだが……。

彼女の腕の中から聞こえていた嗚咽がやみ、顔を再び挙げたとき、和葉は決めた。

「アタシが……真犯人を見つける。平次のためにも……絶対！」

「はあ……さつぱりやなあ……」

ため息と共に、足元の小石を蹴つ飛ばす。何度も弾んだあと、隅の側溝に消える音がした。

（捜査は現場からや！）と意気込んで行つたものの、また警部にいべもなく追い返され、ホテルの駐車場をあてもなくぶらついていた。そこでも何人か紺の作業服を着た人が水銀灯の灯りの下、千代田たちの車を念入りに調べていた。

「（こんなとき、平次やつたらどないするやろ……）」

そう思いながら漠然と空を見上げた。絵の具を流したような濃い紫色の空に、幾つか白く輝く星が見える。

大阪よりも綺麗に見えるのは、きっと空気が澄んでいるからだろう。

「遠山さんの、お嬢さん……ですか？」

突然後ろからかけられた声に驚いて振り返る。

水銀灯の光を浴び、茶色のスーツを着たその人は、

「あ、こういう者です」

そう言って名刺を差し出した。

「……大井さん？ 刑事さんがどうして？」

「いえ、こっちの署に配属になる前、大阪府警に勤めてたんです」

そう言われば、言葉のアクセントに若干大阪訛りが残っている。

「ほんで、その時分、遠山刑事部長にはいろいろと手かけてもらいまして……」

話が途中で途切れた。彼の目線を追つて見ると、草むらの中から警官が立ち上がりて手を振つていた。

「大井刑事へーー」ひち来てくださいへーー！」

「草むらの中から、これが」

そこにはつたのは50センチ四方ぐらゐの真つ黒なプラスチックの板。

「なんなん？それ？」

「さあ…どうもさつぱつ…。とりあえず、鑑識回しここで」

白い軍手をはめた手で警官が板を持ち上げてホテルのほうへ走つてゆく。

「まあ、どうせお密の誰かが捨てたものだとは思つんですけどね。それよりも、今回は服部君が…」

「そつなんよ…花火大会のときまでは一緒にやつたのに、ちゅううどあの時だけ財布取りに行くゆうておらへんで…」

「いっちはは一人きりで？」

俯いたまま、無言で頷く。

「さいですか…。ついにですなあ…。それは、刑事部長もさぞお喜びでしたでしょ」

「へー？」

大きな目をさらに大きくしたまま、弾かれたように顔を擧げる。

状況が状況だけに、ほこりんでくるのを必死にこらえてる大井刑事の顔を見ているつりに、よじやく和葉も前の言葉の意味が呑み込めてきた。

「ち、違つて、そんなんやあらへんーー」

「おつと、警部さんと呼んじるみたいなんで、そろそろ戻らなーいと。それじや」

「ちょっと、待つ…」

和葉が止めるのが聞こえているのか分からぬが、そのまま小走り

で建物のほうへ戻つていった。

「はあ……」

和葉は外に出て一度田のため息をついた。

自分の部屋に戻り、ベッドにもぐりこんでから、どれだけの時間が経つただろうか。

一日、いろんなことがありすぎて、もうクタクタなのは事実だが、だからといってすぐに熟睡できるほどおめでたい性格でもない。数え切れないほど寝返りと共に、また頭は事件へと飛ぶ。

「えつと…アタシが鈴谷さんに会ったのが9時15分で…どうやつたら15分でこっちまで来れるんかいな…。アタシの時計、別に遅れどるわけやあらへんかったし…」

考えれば考え込むほど、どんどん目が冴えて眠れなくなる。

枕元の時計の蛍光文字盤は薄緑色に光り、2時を指している。

「よつ」

思い切つて起き上がり、小さな掛け声と共にベッドを降りる。

「こんなとき…平次やつたら、すぐ解決してまうんやけどなあ…」ほとんど何も見えない暗闇の中部屋を横切り、カーテンを半分開ける。

部屋が微かに形を取り戻す。

窓の下では、青白い水銀灯の灯りが、淡白に光つている。

もう警官たちも引き上げたのだろう、薄暗い駐車場には誰もいなかつた。

しばらく漠然と眺めたあと、なんとなくカーテンをあけたままベッドへと戻り始める。

部屋の真ん中あたりで、ふつと振り返つてみた。

水銀灯の灯りが、半分だけの窓から部屋を照らす。

その刹那、電気ショックでも受けたように、不意に和葉の体が硬直する。

もし……そつなら……

……全てが……繋がる

「……れや……。 平次……、アタシ、わかつてもうた……」

服を着替えるのももどかしく、一目散に部屋を飛び出した。

どこをどう走ったかも覚えていないま、気がつくと事件のあった部屋まで来ていた。

勢いよくドアを開けると、欠伸をしていた刑事が驚いたように和葉の顔を見る。

彼は何か言いかけたが、それも聞かずに和葉は、

「大井さん……今すぐ、みんなをこの部屋に集めて！アタシ……この事件解けてもうた！」

数分後には、詰め所にいた警備員を含め部屋に全員が集められた。

あまりにもとんでもない時間に叩き起しにされたせいか、誰一人として不平を言うものはいない。まだ彼ら自身の置かれた状況を把握するので精一杯だった。

「あのー、こんな夜中に何でしようか？」

側の刑事さんへ掛ける敷波の質問も眼氣のせいか間延びしたスピードで行われる。

「いえ、遠山さんが、皆さんに伝えたいことがあるみたいで……。何でも、この事件の真相がわかつた、とか」

物腰の低い言い方ではあったが、彼の投げた爆弾は見事に爆発した。一瞬にして部屋が重苦しい雰囲気に包まれ、集まつたみんなの目からも眠気の色完全に払拭される。

後に残つたのは、これから起ころうとする事に対する不安を多分に含んだ空氣。

予想を超えるピンと張り詰めた緊張に、和葉は思わず体を震わせた。

「えっと… 今回の事件で、平次が重要参考人になつたんは、アリバイがなかつたから。

せやけど、単にアリバイのない人なら、他にもいます。平次が疑われたもう一つの理由は…」

「事件の起ころる少し前に、バイクが目撃されていたから… 敷波の透き通つた声が遠慮がちにだが響く。

和葉は彼女のほうに向き直つて、

「そうです。でも…アタシ一つ思いついたことがあつて…。もう一度、あの時の話、聞かせてもらえませんか？」

呼びかけられた警備員が、徐に隅の椅子から立ち上がる。

「…9時半前に私が本を読んでいると、バイクが一台通つて…」

不機嫌そうな声を和葉が片手を上げて遮る。

「出来るだけ前に証言したのと同じ表現、使ってもらえます？」

「…私が本を読んでると、急に窓のほうから強い光が当たつて、顔を擧げると、ヘッドライトが一つ、こちらに向かつてくるのが見えました」

早口で言いきると、どしんと勢い良く椅子に座つた。

そんな様子を気に留めず、和葉は続ける。

「今聞いてもらつた通り、彼はヘッドライトを見ただけで…決してバイクを見たわけやないんです」

「ちょっと待てよ。ヘッドライトを見たんなら、バイク見たのと同じことだろ？」

千代田が投げやりに口を挟む。

「どうしてそう言い切れるんです？ ヘッドライトならバイクだけやなくて、車にも付いて…」

「遠山さん。車だつたら灯りは二つでしょ。警備員さんが見た灯りは一つしかなかつたんだから、バイクに決まつてるでしょ」

「大井さん、もし…片方のライトが点いとらへんかったら…？」

一瞬にして辺りは水を打つように静かになり、和葉は一つ、大き

く深呼吸する。

「ヘッドライト外したり、点かへんように壊してまうのは難しいけど…」これは部屋のカーテンを見て思いついたんですが…光が前に漏れへんように覆いをかけるだけやつたら簡単です。花火会場を離れた犯人は、自分の車の片側のヘッドライトを見た後、無言電話があつた、運転してくる。…警備員さんがライトを見た後、無言電話があつた、つて言いましたよね。あれも、ひょっとしたら犯人が掛けたんやないかなと思うんです。駐車場へのわき道の辺りまで来たときに、電話を掛ける。ほら、なんぼ明かりのない暗い道やからつて、車の側面を見せるさんは、犯人にとってもためらわれたんやと思うんです。テールライトも見えますし。電話掛けて、繋がつとる間に道を曲つてもうたら、もう詰め所からは見えへんし…。そうして駐車場に入った犯人は、ライトの覆いを外して草むらに投げ捨てて、外の非常階段からホテルの中に入つて…。

目撃されたんはバイクやということになり、自分は嫌疑から外れる…。せやけど、犯人はいくつかミスを犯してます。ライトの覆い、これはさつき刑事さんが見つけたプラスチックの板やと思います。上手くいけば、車と板とで、同じ接着剤が検出されるかもしれませんし…その人の携帯電話の履歴を見れば、きっと詰め所へと掛けた跡があるはずです」

「そうですね、…千代田さん」

まぶしい日差しの下、白亜の警察署から一人の少年が石段を降りてくる。

降りてくるのを待ちきれないように、和葉が駆け出す。

「平次～！」

一度ぎゅっと抱きついたあと、そうしている自分に気づいたのか、急に顔を真つ赤にして慌てて平次から離れる。

「和葉、お前のおかげや。…おおきに」

にこつと優しげに微笑むと、珍しく平次がお礼を言った。

「ほな、早よ大阪に帰ろか」

まだほてっている顔で和葉がうなずいて、一人は駐車場の隅に停めてあるバイクへと向かつた。

「なあ平次、一つ訊いてもええ？」

碧い風が、和葉の前で二つに分かれて流れゆく。

「ええけど、なんや？」

ヘルメット越しの会話。それでも、前よりも近づいてるような気がする。

「花火会場からホテルに平次が戻ったとき…あれ、本当に財布探しにいつたん？」

部屋のテーブルに、平次の財布、置きっぱなしやつたんやけど…」

何も言わないまま、バイクのハンドルを切つて路肩へ停めた。

平次がヘルメットを外すのを見て、和葉も慌ててそれにならひ。和葉が外し終わるのを待つて、平次がポケットから出したものをほん、と和葉に放る。

「それや」

受け止めた右手を開くと…そこにはつたのは、

なくしたはずのお守り…

「大阪着いてから渡そ思つとつたけど…。ほら、どうせあの頭固い警部にお守り探しとつた、って言つても信じてくれへんやろうし…」

変なときにだけ、氣い回すんやから…

それも…めっちゃ不器用に…

「…アホ…」

でも、くやしいけど、そんな不器用な平次の気遣いが、妙に気に入るのもホントなんよ…。

言いかけた言葉を呑み込んで、急いでヘルメットを被る。

平次も被り、バイクのエンジンを回し始める。

ハンドルを握り直した平次の背中に和葉が言った。

「もう、事故つたらアカンよ」

バイクは大阪へ向かつて、真っ直ぐに走り出した。

いつも、雪場です。

最後まで読んでいただき、感謝の一言で済ませます。いつもありがとうございます。

本格ではないものの、とりあえず推理物を…と書き散りして見ましたが、予想以上に長くなってしまって。慣れないものに手を出

すもんじやないと反省（苦笑）

トリック（と呼べるかどうかは置いといて）は、「バイクが2台並んで真っ暗な中走つてくるとヘッドライトが車に見える」っていう錯覚を扱つたいつかのテレビ番組（推理ドラマではありません）からヒントを得ましたが…。

“作者よつ”まで長くなってきたのでこの辺で失礼します。ご意見、ご感想等ありましたら、遠慮なく書いていただけると嬉しいです。

（ちなみに、一応登場人物の名前（苗字）には関連するものがあります。探すほどのものではないですが）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4909a/>

和葉には向かない職業

2010年10月10日12時18分発行